Good-bye, Mr. Chips と The Leys School

——作品と作品のモデル考——

廣　田　　稔

英国に関する文化研究の一環として，英国の教育機構の中でも，伝統のパブリック スクールには大きな関心が及ぶところである。

筆者はパブリック スクールが英国文化研究の好箇の材料の一つであると認識し，著名な数校を多少とも垣間見ることをその基礎作業と考え，これまでイートン，ラグビー，ハロウ，ウィンチェスターそしてアイルランドとイングランドの間に浮かぶマン島にある，キング・ウィリアムズ カレッジを訪れている。

キング・ウィリアムズ カレッジは Dean Farrar による *Eric, or Little by Little* (1858) の作品の舞台であり，このカレッジが Roslyn School のモデルになっているものである。この物語は現在は残念ながら殆んど読まれることがない作品であるが，*Dean Farrar and 'ERIC'* の著者 Ian Anstruther の指摘によれば，この作品の前年に出された *Tom Brown's School Days* と共に「スクールボーイ物語の祖先としてこれらの作品がほぼ百年続くこととなったスクールボーイ物語流行のさきがけとなった」[1] もので，パブリック スクール物語研究にとって欠くことの出来ない作品である。

イートンは事務長 Mr. Cross の案内で校舎内部も詳しく見る機会に恵まれ，僅かながら資料を得ることが出来た。イートンはナポレオンI世をウォータールー（Waterloo）の戦い（1815年6月18日）で破ったウェリントン侯爵（Arthur Wellesley, Duke of Wellington 1769-1852）の母校であり，彼の遺した言葉 "The battle of Waterloo was won on the playing fields of Eton" は人口に膾炙した名言である。又筆者の先の論考に記した『墓畔の悲歌』の詩人トマス・グレイ（Thomas Gray 1716-71）の母校でもあり，幾多の歴史上の人物たちを輩出している。Nigel Goodman による *Eton College* には以下のように記さ

れている。

「全てのイートン卒業生の中で最も有名な人物は恐らくウォータールーの戦いの勝利者にして後の首相ウェリントン侯爵であろう…。きら星の如く居並ぶイートン卒業生は世のよく知るところであり，ウォルポールと大ピットからマクミランとダグラスハイドに列なる総勢20名。これらと等しく感銘を与えるイートン卒業の作家たちはグレイ，シェリーそしてフィールディングからアルダス・ハックスレイとジョージ・オーウェル，そしてかの偉大なる経済学者ケインズをも忘れてはならない。」(2)

卒業生たちは卒業に際してトマス・グレイの名詩『イートン学寮遠望の賦』を贈られる慣わしと聞く。

YE distant spires, ye antique towers,
That crown the watry glade
Where grateful Science still adores
Her HENRY'S holy shade:
And ye, that from the stately brow
Of WINDSOR'S heights th' expanse below
Of grove, of lawn, of mead survey,
Whose turf, whose shade, whose flowers among
Wanders the hoary Thames along
His silver-winding way:

汝ら遙かなる尖塔よ，汝ら古の塔よ
水の流れの森木立の上に聳えて
ありがたき学問に励み　今もなお
ヘンリー王の聖なる御影を崇めているのか
そして汝らはウインザーの高台の威厳ある岩場から
眼下の森や芝や牧場を眺めやるのか
汝らの芝，その木陰　そしてその花々の中を
古きテムズは流れ行く　銀色に蛇行の尾を引きながら

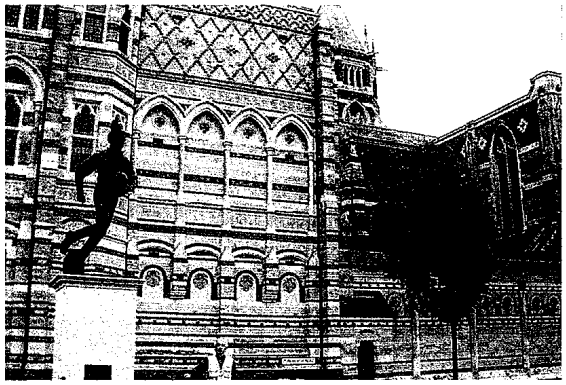
これらの資料の中で英国の古書店で購入した John Rodgers による *The Old Public Schools of England* はロンドンの B. T. Batsford より出された1938年出版の書であり，英国パブリック スクールの数多くの古い写真が掲載された貴重な文献である。もう一冊 Brian Gardner による *The Public School —An Historical Survey* もロンドン Hamish Hamilton から出された1973年出版のもので，これ又最も初期の時代からの幾多のパブリック スクールに関する貴重な書物であり，英国パブリック スクール研究の資料として今後の考察に委ねねばならない。

この小論では，*Good-bye Mr. Chips* を取り挙げ，その舞台となった The Leys School に関して，作者 James Hilton と Mr. Chips のモデルとなった教師 W. H. Balgarnie について，そしてこの作品自体について記述し，英国文化の一考察となしたいものと考える。

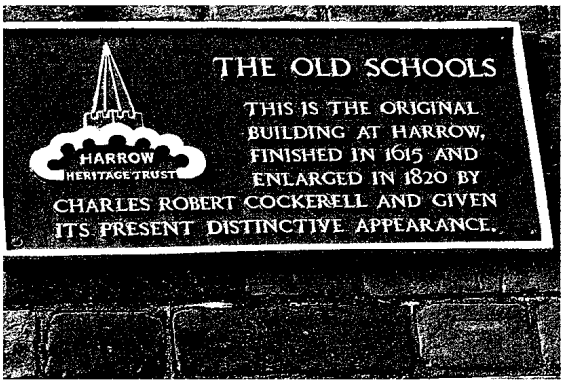
I

パブリック スクールをモデルとした物語としてまず思い浮かぶのは James Hilton（1900-1954）による *Good-bye, Mr. Chips*（1934）そして Thomas Hughes（1822-1896）による *Tom Brown's School Days*（1857）である。前者の舞台はケンブリッジ大学にほぼ隣接する距離にある The Leys School を舞台とし，後者は Rugby School を舞台とする物語である。Rugby はすでに他の論考中に取挙げた戦争詩人 Rupert Brooke（1887-1915）の母校であるが，何よりも念頭に浮かぶのはこの学校こそがラグビー競技の発祥の地であることである。校舎の側，通りに面して，この競技を生み出す元となったひとりの生徒のボールを抱いて走る姿の像が建てられている。彼の名は William Webb Ellis と言い，この少年がフットボール競技中に，興奮のあまり，ボールを抱きかかえてゴールに飛び込んだのである。Ellis 少年が学んだ学舎の名に因んでこの競技の名が生まれたことはあまりにもよく知られている。この新たな競技を生んだグラウンドは今も広々とした緑鮮やかな芝のグラウンドとして横たわり，その校舎側に白い柱のゴールが一際印象的である。『トム・ブラウンの学校生活』第一章に於いてこのラグビー校でのフットボール

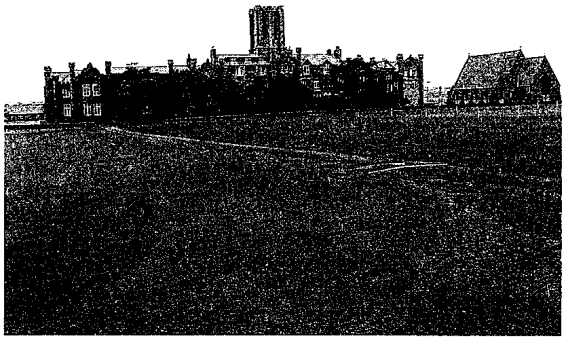
Eton College 正門と教室



Rugby School 校舎前の William Webb Ellis 少年像とグラウンド



Harrow School 正門と銘版



King William's College の校舎と遠景

のことが描き出されている。前者の The Leys School はケンブリッジ市街，ケンブリッジ大学の中心に位置するキングズ コレッジ前のキングズパレードを南の方向に進んで，右手に St. キャサリンズ コレッジ，左手にコーパスクリスティー コレッジを過ぎ，次の小さい四辻で左手にペンブルック コレッジ，その右手にケンブリッジ最古のコレッジのピーターハウス前を進むと，すぐ右に大学美術館フィッウイリアム ミュージアムを通り過ごして行かねばならない。この美術館からさらに約300m位前方にある四辻の交差点右側前方の一角が作品の舞台，The Leys School である。交差点を南へ走る通りは Trumpington Street と称する通りで，この通りはかつて詩人チョーサー（Geoffrey Chaucer 1340-1400）が『カンタベリー物語』*The Canterbury Tales*（1387-1400）に於いて既にその名を記している由緒ある古い並木の通りである。この通りの先は A10，高速 M 1 を経て首都ロンドンへと向う。この The Leys へケンブリッジ大学ペンブルック コレッジのフェロウで中世英語学者 Dr. Colin Wilcokson により，リーズ校の歴史についてのみならず，*Good-bye, Mr. Chips* の作者 James Hilton についての右に出る者のない泰斗，Dr. Geoff Houghton に紹介される機会を得た。ヒュートン博士はケンブリッジ大学最古のコレッジ，ピーターハウスの出身で1957年以来リーズで当初生物学と化学の教鞭を執られ，1966年から1980年までリーズの寄宿舎 North B の寮監（Housemaster）を務められ，1993年この学校を退かれるまで，このリーズと共に歩んで来られた方である。そして何よりもリーズの学校史 *Well-regulated minds and improper moments*（2000）の著者である。このスクール史の標題は1889年から1924年の間リーズに職を奉じた E. E. Kettet による箴言から採られたものであるが，これはリーズ開校以来百年の長きにわたって，学校の規律を犯した生徒が，校則違反の罰則として犯した違反の軽重に応じて決められた回数だけ，この文章の清書を課せられることに決められていたものである。この一文にそこに込められた英国パブリック スクールの建学の精神性の一端を読み取る事が出来るように感じられる。曰く，

"Few things are more distressing to a well-regulated mind than to see a boy who ought to know better, disporting himself at improper moments"

「規律ある精神の持ち主にとって，分別あるべき少年が，しかるべき時を

わきまえず戯れ興じる姿を見守ることほど頭痛の種となるものはない」と。

この書の『はしがき』冒頭にはこの書を著すにあたっての著者自らの言葉が以下のように記されている。

"Several years before North B House reached its Centenary in 1983, I realized, as Housemaster, that stories about life in the House needed recording. I had also become interested in the life of James Hilton, which then led me to seek information about W. H. Balgarnie, the real "Mr. Chips""[(2)]

「North B House が1983年にその百年記念日に達する数年前，私は寮監として寮生活についての物語が記録される必要があるということを認識しました。私は又ジェイムズ・ヒルトンの生涯についても興味を抱いておりましたので，そのことによって真実の「チップス先生」である W.H. バルガーニーについての情報を求めることに導かれたのであります。」

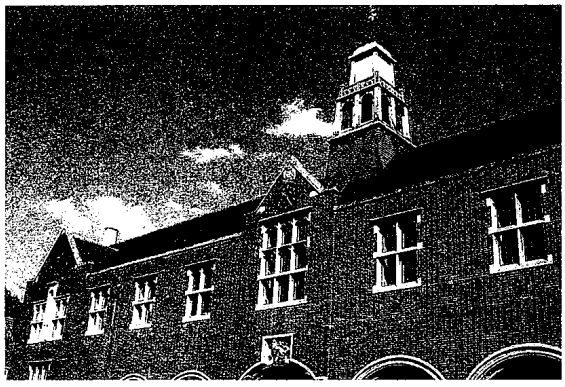
Ⅱ

チップス先生のモデルとなったのはこのリーズ スクールに於て半生を捧げた教師 W.H. Balgarnie であった。Dr. Houghton による彼についての記述は以下のものとなっている。

「人生の多くをこの学校に捧げた教員のもう一人は W. H. バルガーニーであった。彼はウルウィッチ（Woolwich）の長老派教会牧師の息子であった。彼は最初ローアン スクール（Roan School）に入りそれからグラヴセンド スクール（Gravesend School）に学んだ。ここでロンドン大学入学許可試験に合格してその後原始メソディスト派による設立校，ヨークのエルムフィールド スクール（Elmfield School）（現在廃校）で助教授（生徒指導者）となり，ここに在職中に学外ロンドン大学学士号のために勉学して1889年に学士号を取得した。コーンウォールでホウエイ スクール（Fowey School）に於て短期間教えた後，彼は現在ロンドンのエルサム コレッジとなっている宣教師子弟のための学校に移った。そこに於て彼は自分の勉学を続け1893年にロンドン大学修士号を取得した。彼は雇用されていた全ての期間中にケンブリッジ大学に自力で学業を修めていく学費を支払うための費用を貯えた。彼

作品の舞台 The Leys School 正門と芝のグラウンド

The Leys School 本館横の教室



The Leys School 本館

Dr. Geoff Houghton

の兄エリックも彼より３年前に同様のことを行っていたのである。ウィリアムは26歳でトリニティに入学した。このことは彼の同世代の大部分の者たちよりずっと年上ということであった。彼は古典学の優等卒業試験で First の成績を収め，グラスゴー大学の古典学科にギルバート・マレイ（Gilbert Murray）教授の下に参画した。彼はウッドブリッジ スクール（Woodbridge School）で教えるために僅か短期間で古典学科を後にした。最終的に1900年彼の経歴はリーズ（The Leys）に於て始まった。但し彼は短期間リーズを離れる休暇を得たが，それはウッドブリッジに於て新しい校長が任命されるまでそこでの校長代理を務めるためであった。次の29年間彼はその人生をこのリーズに捧げることとなり，彼の生徒達の大多数の者たちに慕われ愛された。彼が教え影響を与えた

リーズ スクール卒業生たちは彼の死後彼らのためにバルガーニーがなしてくれたことへの感謝の気持ちを書き記している。ヒルトン（Hilton）の同級生たちはバルガーニーが彼の文章に対していかに励ましを与えてくれたかを覚えており，そして彼らすべての者たちがジェイムズが自分の作文を教室の者たちに読み上げるのを聞いた時に得た感激を覚えている。バルガーニーは引退後，トランピントン（Trumpington）通りを横切ったばかりのブルックサイド（Brookside）に住み，新入生たちをティーでもてなした。丁度，ヒルトンの小説の主人公がそうしていたようにであった。バルガーニーの同僚の一人は後に，彼の愛する猫を膝の上に抱いて，ボアータバコを詰めたパイプで幸せそうにプカプカ吸いながら口をすぼめペンを手にして，*The Fortnightly* 誌の次号のために原稿を削ったり注釈を付けたり修正したりしている彼の姿が，夕焼け空にしばしば見かけられたと記している。

教員スタッフからは退いたけれどもバルガーニーは，彼の時間の多くを学校で過ごしていた。教員スタッフの一人は彼が学校に初めて来た時，バルガルニーが夕食には大抵の夜彼らの仲間に加わっていたことを覚えている。ジェシー・メラー（Jessie Mellor）が食事の主人役を務めるとバルガーニーは彼の隣に座った。食卓についている者たちはバルガルニーが色々な話を幾度も幾度も繰り返して話すのに耳を傾けねばならなかった。メラーは思いやって笑うのであったが他の者たちはそれ程敬意を払わなかった。

60歳で退職したすぐ後，校長のハリー・ビッセカー師（the Revd Harry Bisseker）が健康上の理由で一年間の休暇を認められて取っている間，校長として働くようにバルガーニーは呼び戻された。彼はそれ以前にバーバー師の退職後ビッセカーが着任する前，校長代理を務めていた。そこで彼はもう一度再び生じた状況に，ある種の皮肉を感じていたに違いなかった。一たん，ビッセガーが戻ってくると，バルガーニーは再びブルックサイドの宿に引きこもることが出来た。ここが彼の以前の生徒であったジェイムズ・ヒルトン（James Hilton）が訪ねた時，彼が住んでいた所であった。後にヒルトンは『チップス先生 さようなら』の中に次のような言葉を書いた。

「道路を横切って古い愉の木立の塁壁の向こうに，秋の蔦に覆われてあずき色となったブルックフィールドがあった」と。悲しいことに高い愉の木々は

オランダ愉病にかかって今は姿を消してしまい，蔦もレンガ部分の漆喰を傷めていたために引き抜かれてしまった。バルガーニーが学校の校庭を横切って目にしていたであろう眺めは今は近代的建物の並びの空に映じる輪郭によって占められている。彼がかつて寮監であったウエスト ハウスに取って替わった新しい寄宿舎の比較的な豪華さをよしとしたかどうかは疑わしい。アルミニュウムの幾何学的な斜めの屋根，寮のコンピューターや調理器具，木ずり作り，炉はこのような学究的古典学者にとっては幻想の品々であったであろう。

『チップ先生 さようなら』は戯曲化され，そして，ロンドンの初演の夜，ヒルトンはカーテン コールのために舞台に呼出されたが，その時，彼はバルガーニーが座っていたボックス席にスポットライトを向けさせた。バルガーニーはケンブリッジに戻った時にとてもばつが悪かったと一人の同僚に語ったものの，同僚達の幾人かの印象では，彼がそれを喜んでいたと思えた。後年，彼はその芝居は小説の人物の半分しか演じていないものであったので，あまり評判にはならなかったと語っていた。1951年にバルガーニーが亡くなった時，ヒルトンはその時なおリーズ校の校長であった Dr. Humphrey に手紙を次のように書き送った。

「バルガーニーは私が思うに，私がこれまで得た限りでの私の物語の主たるモデルでありました。私の学校生活に於て彼は確かに私にとって決して忘れることの出来ない人物でした。パブリック スクールの生活についての他の多くの物語を読んでみると，私自身は多くの物語の作者たちが明らかに味わったような，苦難の経験に苦しめられることなど全くなかったという事実に私は心打たれています。そしてこうした奇跡（もしもそうしたことが奇跡であったとしたならば）の多くはバルガーニーのお陰によるものでした。彼は私がごく普通の生徒ではなかったことを認めていたというばかりでなく，彼がこんなにひどい生徒などいるものではないという，より深い真実を見出していたからだと思うのです。」

バルガーニーは，主人公チッピング氏とは異なって一度も結婚はしなかったけれども，彼が結婚したいと願っていたのは誰だったのだろうか。その女性は彼を断ったというものの，結局彼女は息子をリーズ校に送って，彼の寮に

チップス先生のモデル Balgarnie

ブルックサイド 6 番　Balgarnie 下宿

入れたということが報告されている。この少年は後にジャーナリストとなりカナダに移住した。この話はこの人物が既に亡くなり，結婚もしていなかったので確かめることは出来ないが。

バルガーニーは教員として1900-1930及び1940-1946をリーズ校で過した。[4] バルガーニーが下宿したブルックサイド6番地の家は現在もリーズの校舎の正門前のトランピントン通りを横切った住宅群の一角の隅に当時のまま存在することを筆者はDr. Houghtonの案内で確認することが出来た。

Ⅲ

バルガーニーを主人公とした名作『チップス先生 さようなら（*Good-bye, Mr. Chips!*）』の作者James HiltonについてDr. Houghtonの著作によると以下の通りである。

「ジェイムズ・ヒルトン（スクールハウス1915-1918）は恐らく全てのリーズ校出身の作家たちの中で最も良く知られている。彼の小説『チップス先生さようなら』は多くの人々によって，献身的学校長についての，時代を問わぬ最高の描写であると見做されている。ジェイムズは1900年に生れた。彼の父はロンドン北部の小学校校長であった。…

ジェイムズはロンドン北部の学校に行き，最初は土地の小学校そしてそれからグラマー スクールに入った。1914年6月に彼はHaileybury Collegeの奨学金を得た。しかしながら常に平和主義者であった彼の父が，この学校の学校案内から，そこがライフル射的場と将校養成隊の両方を所有するということを見つけ，ジェイムズは入学者リストから撤回させられた。又この時第一次大戦の最初の年に当たり，ジェイムズはロシアの情勢に興味を覚えた。特にこの国を述べ伝える手紙を彼に書き送っていた彼の叔父の一人が，ロシアで粉引き場の支配人だったからである。ジェイムズはロシア語を学び始め，ロンドンにあるロシア銀行の職に応募し，そして彼はもう少しでその職を得るところであった。もしも彼がそのようになっていたならば，彼はロシアに送られ，ロシア革命の間ロシアにいるということになっていたかも知れない。とに角こうした出来事が彼の後の書き物に大いに影響を与えた。こうした出

来事はロシアから追放され，しばらくの間無一文となった彼の叔父にさらに影響を与えたのである。しかしながら彼の叔父は繁栄を取り戻し，そして1951年叔父はブラックプール（Blackpool）の市長となっている。

ヒルトンが15歳になった時，彼の父は再びジェイルズをパブリック スクールに送り出すことを考えた。しかし，ジェイムズの父はどの学校にするか決めることができなかったので，息子に自分自身で選ぶことを許した。ジェイムズ少年は一人でイングランドを旅し，ヨークからチエルテンハムへ又ブライトンからシェルボーンへ汽車の旅を行い，校長に面会した。彼に会うことを断った校長は僅かに２人か３人であった。ジェイムズは後に彼のこの時期の人生について述べて，彼は校長たちが，少年たちの両親に対する印象よりも，少年たちに対して得た印象の方により関心を示してくれればよいことだと考えたと記している。そして結局ついに彼はある週末をケンブリッジで過して，そして大学と街の雰囲気の両方に感銘を与えられ，リーズ スクールの校長ドクター バーバー（Dr. Barber）も彼を迎えてくれた。その迎え方に印象付けられたのであった。彼はこの学校にライフル射的場と将校養成隊があったにも拘らず，ここを自分の学校として選び出した。ジェイムズは彼の父親が物忘れしがちであり，又気にとめない性質であるという事実に望みを託して彼はこの学校に登録し，1915年の夏学期の半ばに入学した。

ジェイムズの *To you, Mr. Chips* の中における自叙伝的章の中で，彼は自らが模範的な生徒ではなかったことを思い起こしているが，彼はリーズ校で幸せであったので，このことはこの学校にある程度の寛容さがあったことを示している。戦時ではあったけれども，彼は殆ど強制的な将校養成隊に加わることを強いられることはなかった。当時典型的なある種の偽善があった。ヒルトンは日曜日の礼拝堂の説教がしばしば「敵を許そう」というテーマの下に行われていたが，月曜日には士官候補生たちがフットボール競技場の上に設けられた袋に銃剣での教練を行っているのを見守るという具合であった。ジェイムズにはこうした矛盾が彼の心にとりついて離れなかった。

ジェイムズは大戦の間，他の多数の生徒たちと同じように戦いの話によって大きな影響を受け，*The Fortnightly* 誌に掲載されることとなった彼の短編のいくつかが，塹壕の中及び家庭に於いても共に彼が戦いに気を取られてい

たことを映し出している。16歳の夏の休み中にはロンドン上空へのツェッペリーン飛行船による空襲を目撃した。彼はその経験を短編に纏め，その出来事があった3週間も経たない中に学校の雑誌に掲載された。『銃剣』（*The Bayonet*）と題したもう一編の物語には砲弾によってできた穴の中でイギリス兵とドイツ兵が一夜を明かす話が語られた。

ヒルトンの同級生たちの多くのものがジェイムズとクラスを共にした感動を語っているが，ヒルトンは彼の書いた物語を第6年級の他の生徒たちに読み聞かせるようにしばしば求められていたのである。同級生たちは彼が静かな生徒だったと伝えている。そして普通の生徒たちと彼を目立たせていた唯一の点は，寮の地下にある浴槽の一つに一匹の大きな魚を飼っていて，誰か風呂に入りたいものがあるといつもその魚をすくい出していたというものであった。時々彼はキングズ コレッジチャペルでの夕べの祈りに出かけたり，しばしば夏の半日休暇を利用してグランチェスター（Grantchester）のオーチャード（Orchard）ティールームへ，ティーを飲みに自転車で出かけていた。ある時彼はイッピング フォーレスト（Epping Forest）にある彼の家まで自転車で出かけて彼の女友達と会って帰ってきても，寮監に気付かれずじまいであったこともあった。

彼の早い時期の書き物のいくつかは彼の亡くなったいとこであったローランド（Rowland）とエリザベス・ヒル（Elizabeth Hill）の許に残されていた。これらのものの中で学校の練習帳に彼が書いていた短い小品があった。それはイッピング フォーレストでサイクリングしている間に出会った一人の少年と少女の物語で，その後どのように2人が恋したかを語るものであった。又その収集物の中にはジェイムズが16歳になったときにつけ始めていた短い日記があった。ある箇所に「今日は手紙一通来なかった」そして次に，「今日も又手紙が来なかった」とある。それから彼はその日曜日の校長の説教が友情の終わりと思われたような気持ちを克服するのに，どんなに助けとなってくれたかを記している。彼は続けてどのようにして彼が女友達と出会ったかを書き記したかを述べている。これらの出来事は物語の中に記された出来事ときわめて似通ったものであるが，しばしば形を変えて移し描かれた。例えば物語の中で彼のタイヤがパンクしてしまったことはその女性に実際に起

こったことであった。

ヒルトンの学校生活は1918年７月に終わった。彼や彼の友人たちの学校生活は戦争と実際に兵役を務めることへの思いによって影を落とされていた。彼らはもしも戦争が長引くこととなれば，彼らが受けてきた教育の高い理想といかに矛盾するものがあろうとも，戦争に参加しなければならなくなるだろうということを知っていた。差し迫った悲劇によっても彼らは殆ど悩まされることはなかった。それが学校生活の喜びを際立たせ，学校生活のささいな困難に対しての緩衝役を果たしてくれた。ヒルトンの場合にあっては，差し迫った悲劇が彼の思い出の焦点となった。彼は次のように書いている。

「学校長の注意深い生徒評価ももっと大きいもっと荒っぽい点数付けによってかき消されてしまった。学校を放校となった一人の少年が勲章をつけて英雄として戻ってきた。avoire 動詞や être 動詞を活用変化させることが出来ないことは，1913年に於いては将来の前途を危うくすると思われていた者達が，フランス語を征服する以上にフランスの敵を征服することとなったのだ。１月に喫煙したことによって禁足を命ぜられる校則を犯した者達が12月には空から爆弾を投じていた。それは狂気の世界だった。そして僕たちも口に出しては言わないものの，そうだと分かっていた。ゆっくりと一歩一歩と戦争の潮は僕たちの隠遁の場の門口にひたひたと押し寄せていた。」

ヒルトンはクライスト コレッジに奨学金を得た。戦争のその時期に男子学生たちは勉学を始める前に６週間から８週間，集中訓練を行う大学の将校養成隊に加わるという条件付きでケンブリッジに起居することができた。結果的には戦争が11月に終結し，彼は勉学を途中でさえ切られることもなく続けることができた。彼は非常に良い成績を収めたので，コレッジは４年目の研究を行えるように奨学金を与えた。彼は最初の３年間コレッジに住んだが，４年目に彼はクライストピースを離れ，ビクトリア ストリートのベランダ付の部屋の下宿屋に移った。その家は今日も見ることの出来るものである。リーズ スクールに居た間に小説を書き始めていたが，それをコレッジで書き終えた。その『キャサリンという名の女』（*Catherine Herself*）という小説は女性ピアニストと彼女のピアノ教師が２人の間でスヴェンガリ的形の演奏会をギルドホールで開くというものであるが，ケンブリッジの街の描写，そ

してライオンヤードのショッピング センターと駐車場を作るために壊された通りの描写は，当時を偲ばせてくれるものであった。この小説は自叙伝的なものだと言われている。エゴイストのキャサリンはヒルトンの他の一面の自己描写である。彼はいつもコンサート ピアニストになる野心を抱いていたが，ピアノ教師の性格はジェイムズの父親を基にしたものであった。

ケンブリッジを出るとすぐに彼は主としてマンチェスター ガーディアン誌に記事を書く自由契約のジャーナリストとしての経歴を踏み出した。この新聞への彼の最初の仕事は，彼がリーズ スクールの雑誌のために書いていた最後の物語を僅か6語を変えて移し書きすることであった。これはクライスト コレッジ マガジンにも掲載されていたものであった。それはドイツと戦う戦争に狩り出された一人の読み書きのできないロシア農民の物語であった。ロシア革命が起こった時，彼は他の多くの者たち同様に故郷の家に戻るために脱走した。しかしながら彼は帰る道が分からなくなり，そしてその名もない村の名も思い出すことが出来なかった。物語は彼が汽車にひかれて死ぬところで，そして彼が故郷の家に辿り着いたと思う束の間の幸福を味わうところで終わっている。

このテーマは後に彼が1933年に書いた『鎧のない騎士』（*Knight Without Armour*）という小説の一章となって拡がった。この作品は後にマルレーヌ・ディトリヒ（Marlene Dietrich）とロナルド・コールマン（Ronald Coleman）主演による映画となった。この作品のテーマは，又彼のほかの作品中の一作『乱獲』（*Random Harvest*）の中に取り入れられた。彼がロシアに居る叔父から受け取った手紙類が，彼に一度も訪れたことのない国についての眼の当たりに見るような生き生きとした姿を与えてくれていたのである。

ヒルトンの家族の者達は彼の経歴の初期の頃，彼のことを大いに気遣った。彼は経済的には決して安定していなかった。マンチェスター ガーディアン誌への定期的寄稿者であるばかりでなく，ディリー テレグラフ誌に小説批評を行った。その間彼はほぼ2年ごとに新しい小説を出版した。彼はペンネームを使ってホキントンと呼ばれる学校を舞台とした『スクール殺人事件』（*Murder at School*）という探偵小説を書いた。これはきわめて彼の居た頃のリーズ校に似た響きのもので，登場人物の探偵はヒルトン彼自身に基づく

ものであった。

ついに1931年 *And Now Good-Bye* によって成功が訪れた。1933年に *Lost Horizon*『失われた地平線』が続いたがそれは時が静かに佇んでいるチベットの遠く離れた片隅の物語であった。1935年までにこの小説は11万部を売り，当時としては相当な部数の売れ行きであった。1937年にはこの小説はロバート・コールマン主演によって映画化されて非常な成功を収め，1970年代初めに先の映画ほどの成功ではなかったが，ミュージカル化された。この小説で1933年，ヒルトンはホーソンデン（Hawthornden）賞を受賞した。この賞の結果として *The British Weekly* 誌からクリスマス向けの短編執筆の委託を直に受けた。ジェイムズは考えましょうと返事をし，イッピングの森へ自転車を走らせ，構想を携えて戻ってくるとその4日後には *Good-Bye Mr. Chips* を書き上げてしまった。編集者たちは大いに喜びはしたものの，その結果には戸惑わざるを得なかった。編集者たちが委託した3000語の短編の代わりに17500語になってしまっていたからであった。この問題の解決をするために，差込付録として出版することにした。1933年12月7日に出版され，ビップ・ペアーズ（Bip Pares）による挿絵入りとなった。

この本はアメリカの雑誌 *Atlantic Monthly* 誌に売られることとなり，同誌は既に出版されたものはいかなるものであれ使用しないという通常の規則に反してこの本を出版することとした。それは非常に成功を収めたのでアメリカでハードカバー本として出版され，次いでイギリスで1934年10月初めて同じ体裁で出されることとなった。当時一人の米国婦人がアメリカで会った一人の素敵な学校の校長に一冊を送った。彼女は校長からの礼状の中にこの校長がこの小説の舞台を提供したリーズ校の校長職に任命されたばかりだということを読んで，面白い興味深さを覚えた。彼女がこの本を買ったとき，自らが校長ジェラルド・ハンフリー博士（Dr. Gerald Humphrey）の妻となり，リーズ校に住むことになろうなどとは殆ど思いもよらないことであった。

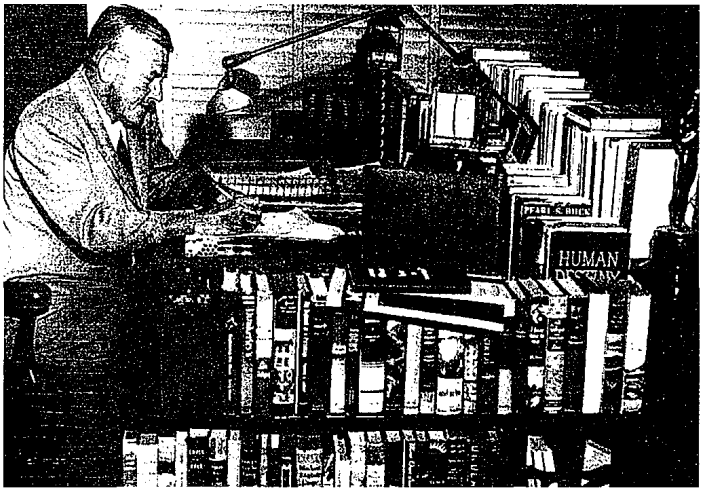
ホダーとスタウトン（Hodder and Stoughton）によって出版された初版の表紙には学校のキングズ ビルディング（King's Building）門がはっきりと写し出されている。しばらくの間，チップス先生のモデルが誰であるかの議論があった。ヒルトンは彼の登場人物ミスター チッピングをリーズ校校長で

あり，退職してブルックサイド（Brookside）6番地に住まうW.H.バルガーニー（Balgarnie）に基づかせていたのである。ここがヒルトンが訪れたときのバルガーニーが住んでいた所であった。ヒルトンは多くの以前の生徒たちと同様，ケンブリッジを訪れて彼を訪ねていた。

Lost Horizon と *Good-Bye Mr. Chips* 両作の成功によってヒルトンは脚本家としてハリウッドに招かれた。彼はそこで当時最高級のシナリオ作家となった。ジェイムズは *Mrs. Miniver* の脚本作家としてオスカー賞を獲得し，Greer Garson が題名役の演技でオスカー主演女優賞を獲得した。ジェイムズ自身の本も又映画化されたがそれらは Marlene Detrich 主演の *Knight without Armour, The Story of Dr. Wassell, We are not Alone, Random Harvest, Rage in Heaven* を含むものであった。*Mr. Chips* ではオスカーを Robert Donat が獲得したが，意外な事にヒルトンは自ら自身のこの小説の脚本を書くことはなかった。

彼は書き続けていった。1951年の *Morning Journey* はハリウッドを舞台として，映画製作監督，女優及び脚本家たちの間における緊張関係を描き，1948年に書かれた *Nothing So Strange* はアメリカとカリフォルニアのハリウッドを設定としたものであった。その筋は最後には広島への原爆投下にいたる科学者間の葛藤を扱ったものであった。

1950年頃には彼はハリウッドにおけるライフ スタイルのもたらす圧迫感に幻滅を感じるようになっていた。彼は家族宛に自分が自分のペースで小説を書くことに戻りたいという手紙を書いている。彼は自らの大いなる成功にも拘らず，控えめで交際をあまり求めない人間であった。1951年にケンブリッジを訪れて母校を訪ねた。彼の家族のものが学校の食堂の外での彼の写真を所持しているが，彼はクリケットを観戦しても自分が何者かを誰にも告げようとはしなかった。



『チップス先生さようなら』の作者 James Hilton

ヒルトンは1954年ガンにより死去した。彼は生涯最後の6週間を病院で過ごし，彼の最初の妻 Alice がその最後の3週間ベッドのそばに付き添った。タイムズ紙は彼の生涯最後の数日間，毎日彼の容態書を掲載した。(5)

Ⅳ

『チップス先生 さようなら』はこの名作の舞台となっているブルックフィールドスクールに於いて，教師人生の殆どを，いやむしろ生涯の大半を過したチップスという教師の回想物語として記されている。

物語は既に十年も前にブルックフィールド スクールを退き，この学校の校舎には道路一つを隔てただけで隣接するウィケット夫人と称するこの婦人所有の家に住んで晩年を迎えたチップスが，うとうとしてものうげな秋の日を過している所から始る。ブルックフィールドでは秋の学期も進み日も短くなっている日のことである。“the hours seem to pass like lazy cattle moving across a landscape”「まるで田園の風景をのろのろと進み行く牛の群れのように時は過ぎ行くよう」という冒頭の出だしは，トマス・グレイの『墓畔の悲歌』の冒頭の一節にある “the lowing herd wind slowly o'er the lea”「牛の群れは低く鳴きつれて，のろのろと野を進み行く」を想起させる。

1848年生れのチップスはメルベリで1年勤めた後，1870年普仏戦争勃発の年のウェザビー校長時代，ブルックフィールドに履歴書を提出したのであったが，赴任のために校長と面会した日は，運動場からクリケットの球が快く響く7月のあるさわやかに晴れた日のことであった。ブルックフィールドの様子は次のように記されている。

“Across the road behind a rampart of ancient elms lay Brookfield, russet under its autumn mantle of creeper. A group of eighteenth-century buildings centred upon a quadrangle, and there were acres of playing-fields beyond, then came the small dependent village and the open fen country. Brookfield, as Wetherby had said, was an old foundation; established in the reign of Elizabeth, as a grammar school, it might, with better luck, have become as famous as Harrow.”

「古い楡の木立の塁壁の向こうにある道路を横切ってブルックフィールド

は秋のつたに覆われて赤褐色の色合いに横たわっていた。一群の18世紀の建物が中庭を真中に囲んでいた。そして何エーカーもの運動場が広がっていた。それから小さな学校付属の村があり，広々とした沼沢地があった。ウェザービーが語ったところによれば，エリザベス女王治世の御代に文法学校として設立された古い学校であった。もっとよい幸運に恵まれていたならばこの学校はハロウ校と同様な名声を博し得たかもしれないというものであった。」

この学校は長い歳月の間に幾多の盛衰を経ていたが，ジョージI世時代に本館が再建され大きな増築がなされた。その後ナポレオン戦争後ヴィクトリア朝半ばに至るまで，生徒数に於いても評判も落ち目となっていた。1840年にウェザビー校長が着任して多少回復したものの，それに続く歴史によっても一流校とはなり得ていなかった。「それにも拘らず，二流の立派な学校であった。」いくつかの名のある家族がこの学校を支えていて，時代の歴史を作る人物たち—判事，国会議員，植民地行政官，二・三の貴族や司教たちを立派な例として生み出していた。とは言え，たいていは商人，製造業者や法律家や医師といった専門職の者，かなりちらほら地方の大地主や牧師となった者たちがその卒業生であった。この学校のことが話題となる時には，紳士気取りの人々がこの学校のことを耳にしたことはあるように思うと言いそうな位の学校であった。

このような学校にチップスは職を得たのであるが，しかしその程度の学校でもなかったならば恐らくチップスを採用することはなかったであろうと作者はチップスについて言及する。

"For Chips, in any social or academic sense, was just as respectable, but no more brilliant, than Brookfield itself."

「というのはチップスはいかなる社会的，或いは学問的意味に於いてブルックフィールド校と丁度同じ位立派ではあるが，ブルックフィールド同様異彩を放つような人物ではなかったからである。」と。

このようなチップスではあったが，この学校へ着任して10年を経た1880年頃には彼はこの学校より別の学校へ栄転する望みはないことの悟りと同時に，この学校での地位に心からの喜びすら抱きつつ，40歳を迎え，50歳には最古参の教師となって，60歳になると新任の若い校長の下で彼こそブルック

フィールド学校そのものとなっていた。教室では記憶法や語呂合わせやジョークによって生徒たちを笑わせ，そうしたユーモアによって生徒たちに何かしら感銘を与える教師であった。ブルックフィールドの歴史と伝統に影響を与える存在として1913年，65歳となったとき，彼は小切手と机と時計とを贈られて退職し，道路一つ隔てたウィッカー夫人邸に住み込みの住人となったのである。

チップスが移り住んだ家とそこでの生活は以下のように記されている。

"It was a small but very comfortable and sunny room that Mrs. Wickett let to him. The house itself was ugly and pretentious; but that didn't matter; it was convenient, that was the main thing. For he liked, if the weather were mild enough, to stroll across to the playing-fields in an afternoon and watch the games. He liked to smile and exchange a few words with the boys when they touched their caps to him. He made a special point of getting to know all the new boys and having them to tea with him during their first term. He always ordered a walnut-cake with pink icing from Reddaway's, in the village, and during the winter term there were crumpets, too—a little pile of them in front of the fire, soaked in butter so that the bottom one lay in a little shallow pool. His guests found it fun to watch him make a tea—mixing careful spoonfuls from different caddies."

「ウィケット夫人が彼に貸し与えたのは小さいがとても居心地のよい日当たりの良い部屋であった。家そのものは見てくれのよくない仰々しい感じのものであった。しかし，そのようなことは問題ではなかった。便利な所にあってそのことが肝心であった。というのはもしも天気が充分に穏やかな日であったならば，彼は午後を運動場へ道を横切ってぶらぶらと出かけて試合の見物をするのが楽しみだったからである。彼は少年たちが彼に帽子に手をかけて挨拶すると笑いかけて，二言三言彼らと言葉を交わすことが好きだった。とりわけ彼は新入生たち全員を知ろうと心掛け，最初の学期中に彼らをお茶に招こうとした。彼はいつでも村のレダウェイの店から，ピンクの砂糖のふりかけの衣をまぶしたくるみ入り菓子を注文した。そして冬の学期の間にはマフィンもまたご馳走した。——暖炉の前に小さく山にした菓子がバターの中に浸されてしまい，一番下にあるものが小さな浅い溶けたバターの中につ

かっていた。招かれた者たちは彼がお茶を入れるのを――色々な茶筒から注意深くスプーン一杯にした茶を混ぜて入れるのを見て楽しんでいた。」
チップスはこの新入生たちをこのようにしてもてなしながら，彼らの住んでいる所，身内の者の中にブルックフィールド出の者たちがいるのかどうかを尋ねながら，彼らの皿が決して空にならないように見守りながら一時間の閑談の時を過ごすと，５時きっかりに時計の方をちらりと見やってこう言い出すのがきまりであった。
"Well—umph—it's been very delightful—umph—meeting you like this—I'm sorry—umph—you can't stay…."
「ところで――うむ――とても楽しかったよ――うむ――君たちとこんなにして会えて――済まんが――うむ――引き上げてもらわにゃいかん…」
そして彼は玄関で笑いながら握手をして彼らを送り出す。このようにチップスの晩年の日々は過ごされていく。

チップスには旧姓キャサリン・ブリッジズという当時25歳の美しい女性との出会いがあり，後日彼女とロンドンで結婚式を挙げることができた。チップスが48歳という年齢となっていた1896年の夏，湖水地方のグレイト ゲイブル山に登った時の思いがけない出会いがそのきっかけであった。キャサリンは当時としては珍しく，女性であるにも拘らず自転車を乗り回し，イプセンを崇拝し，女性の大学入学が認められるべきことを信じ，女性の選挙権獲得を考える非常に進歩的な政治的意見を保持していた。そのような女性からチップスは愛情を持たれることとなったのであった。その理由はチップスの人柄やその態度にあったが彼女によって好意を持たれたチップス像は以下のように描かれている。
"She liked him, initially, because he was so hard to get to know, because he had gentle and quiet manners, because his opinions dated from those utterly impossible seventies and eighties and even earlier—yet were, for all that, so thoroughly honest; and because—because his eyes were brown and he looked charming when he smiled. "Of course, I shall call you Chips, too," she said, when she learned that that was his nickname at school." "
「彼女がそもそも最初に彼を好きになったのは，彼の人柄を知るのが一筋縄

ではいかないものであったからであり，彼が穏やかで静かな態度の持主であったからであり，彼の抱く意見はまったく1870年代及び80年代の，そしてそれよりももっと以前の，今ではまったく考えられもしないようなものの考え方の持主であったからであり，そうしたことがあるにも拘らずまったく正直そのものであり，彼の目の色が茶色であって，笑った時の表情が魅力的であったからである。「もちろん私も，あなたのことチップスって呼びますわ」とそれが学校での彼のあだ名だと分ると彼女はそう言った。」

そしてキャサリンにはチップスに教師という天職を得ていることを何よりも高く評価して語りかける言葉があった。この彼女の言葉は，作者ヒルトンがチップスという主人公の生き方を通して，教育という職業がいかに尊いものであるかということを，彼女の言葉によって読者に伝えようとしたメッセージと言えるものである。

"Oh, Chips, I'm so glad you are what you are. I was afraid you were a solicitor or a stockbroker or dentist or a man with a big cotton business in Manchester. When I first met you, I mean. Schoolmastering's so different, don't you think? To be influencing those who are going to grow up and matter to the world...."

「ねぇチップス，私あなたがいまのあなたであるのが嬉しいわ。私あなたが弁護士か株式仲買人とか歯医者さんか，それともマンチェスターで大きな綿織物商売をしている人ではないかと思っていたの。あなたに初めて会った時にはね…。先生の仕事ってそんなものとは大違いと思わない。大きくなって世の中にとって大事な人たちとなる人たちに影響を与えられるってことはね…。」

このようにキャサリンは教師として将来に望みある若い生徒たちを教え導くという聖職にあるチップスを励ましつつ，彼女はチップスのブルックフィールドに於ける教育上の諸問題に貴重な数多くの助言と示唆を与えて，チップスを支えていくのである。彼女は言わばチップスにとっての指針的存在であった。

彼女は身分，階級を越えて人は平等であるべきとするリベラルな思想性を所持していたが，そのような姿勢を如実に示し出した一つのエピソードが記される。このエピソードは英国社会にかたくなに存在する所謂，上流階級と下

層階級との差別的意識を生み出している "class conscious" な英国人の社会的因習への批判が読み取れる。そのエピソードに彼女の社会改革派的理想主義精神が見事に示し出されている。ブルックフィールドがロンドンのイーストエンドに経営する慈善学校があったが，この学校へは生徒とその両親の寄付金が出されているものであった。イーストエンドはロンドン東部の貧民区域であり，生徒にしてもその両親も個人的接触をする者は殆どない状況であった。そのような慈善学校のサッカーチームをブルックフィールドに招いてサッカーの試合をすることをキャサリンは提案する。このようなことはブルックフィールドの伝統からすれば，あたかも革命を起こすかのような提案であった。

"To introduce a group of slum boys to the serene pleasaunces of better-class youngsters seemed at first a wanton stirring of all kinds of things that had better be left untouched. The whole staff was against it, ...Everyone was certain that the East End lads would be hooligans, or else that they would be made to feel uncomfortable; anyhow, there would be "incidents," and everyone would be confused and upset."

「貧民街の少年グループを上流階級の生徒たちの穏やかな学園に招くなどということは最初はさわらぬ神にたたりなしといったような，ありとあらゆる種類のものを理不尽にも撹乱するようにも思われた。全職員が反対した…誰もがイーストエンドの若者たちは不良少年たちに違いない。そうでなくても不愉快な目に合わされるのがおちだ。とにも角にも「やっかいな事」が起って誰もが混乱しあわてふためかさせられるだろう。」

こうして富裕なイギリス上流社会の階層に属する人々の下層の貧困者に対する偏見や先入主観が，ブルックフィールドに関わる全ての人々の反応の中に浮き彫りにされ，そうした偏見や先入主観がいかに歪曲した不当なものであったかが，その後の結末の結果によって証し立てられている。

このようなブルックフィールドの歴史や伝統的慣例に背いた前代未聞の暴挙とも見える提案を，キャサリンが主張したのは1890年代のことであったことを考慮すれば，彼女がいかに近代的理想主義に燃えていた稀代の女性であったかが察せられる。作者ヒルトンの平等博愛主義的作家姿勢が窺われるものと思われる。キャサリンは次のように自らの信念を力説して訴え説得す

る。

"Chips," she said, "they're wrong, you know, and I'm right. I'm looking ahead to the future, they and you are looking back to the past. England isn't always going to be divided into officers and "other ranks." And those Poplar boys are just as important —to England—as Brookfield is."

「「チップス」と彼女は言った。「皆間違っているわ。そして私の方が正しいわ。私はね未来を見つめているの。みんなはそしてあなたは過去を振り返って見ているんだわ。イギリスはいつも将校たちと「他の階級の者たち」とに分けられていくとは限らないわ。そしてあの下層地区の少年たちもイギリスにとってブルックフィールドと同じように大切なのよ。」」

ブルックフィールドは歴史の古い学校であるとは言え，作品冒頭に於いて示される通り "it might, with better luck, have become as famous as Harrow."「運よく行けばハロウ校と同じ位有名になっていたかも知れない。」とはいうものの，それまでの歴史の中で隆盛の時代も皆無ではなかったにしても，"it's subsequent history never raised it to front-rank status. It was, ...a good school of the second rank."「その後の歴史の中で一流校に上ることは決してなかった。二流での立派な学校であった。」と記されるように，英国の最も名門パブリック スクールとして名高い，ウィンストン・チャーチルや詩人バイロンの出身校のハロウや，イートン，ラグビイ，ウィンチェスターといった一流の学校ではなかった。上流階級の子弟が学んでいたにしても，イギリス最高のパブリック スクールではなかった学校の場合でもこのような下級階層蔑視であったのだから，上記のような一流の学校に於ける場合であったとしたらどのようなものであったかが容易に察せられる。

ところでこのサッカーの試合の計画にはチップス自身も熱心な推進者となり，学校当局もこの "the dangerous experiment"「危険な試み」についに同意し，サッカーの招待試合は実行された。結果は，ブルックフィールドの第2チームの7対5の勝利で，イーストエンドのチームは惜しくも敗れた。試合が終ると学校のダイニング ホールでのお茶と肉料理とのハイティーが催され，慈善学校のチーム メンバーは校長に紹介され，学校内を見物させてもらい，駅までチップスによって見送られた。作者は以下のように記す。

"Everything had passed without the slightest hitch of any kind, and it was clear that the visitors were taking away with them as fine an impression as they had left behind. They took back with them also the memory of a charming woman who had met them and talked to them; ..."

「万事すべていかなる種類の支障もなく終了した。そして遠征チームはブルックフィールドのいい印象を持ち帰ったがそれと同じく，彼らもいい印象を後に残したことは明らかであったのである。彼らは又彼らに会って話しかけてくれた魅力ある夫人についての思い出も持ち帰った」

結局案ずるよりは生むが易しという形になり，イーストエンドの貧しく下層階級の生徒たちも，立派なスポーツマンシップを発揮することのできる精神性を備えた優れたイギリスの若者たちであることが証明された。そして又彼らは一人一人が自分たちのことを思い，励まし助力してくれた一人の夫人への感謝の気持も忘れることのない，人間性豊かな若者たちであったのである。そして彼らも又祖国のために，上流階級の若者たちと同じく役立とうとする者たちであった。事実，後年彼らも又第一次大戦という祖国の命運をかけた戦いにおいて，祖国のために命を捧げた若者たちであった。この大戦下，ブルックフィールド近くの兵営に駐屯した一人の兵隊がチップスを訪れ，別れ際にチップス夫人の消息を尋ね，夫人が元気であるのかを尋ねるのであるが，その若者はパッシェンデールというベルギー，フランドル地方の村での戦闘に於いて戦死する。こうした悲劇がそのことをよく物語っている。ここには身分の上の者も下の者も，富める者も貧しき者も共々に等しく祖国のために殉じて役立つ人々であるという作者の深い共感がこのようなエピソードに込められている。

キャシイという一女性は単にチップスの妻としてのみならず，ブルックフィールドの良き精神の担い手ともなり，貴重な得難い教訓を遺していくのである。このことを作者は次のように語っている。

"Kathie broadened his views and opinions, also, giving him an outlook far beyond the roofs and turrets of Brookfield, so that he saw his country as something deep and gracious to which Brookfield was but one of many feeding streams."

「キャシイは彼（チップス）の見方や見解を広げ，又ブルックフィールドの

屋根や尖塔の遥か遠くまで届く視野を与えてくれた。そのお陰でチップスに，祖国イギリスが何か深遠で慈愛に満ちた国であり，ブルックフィールドもその多くの養い育てる水の流れの一つにすぎないことを分らせてくれた。」

このように情愛深く知性に優れた女性であったキャサリンであったが，悲しいことに彼女はこの記念すべき交換試合から，僅か一年も経たないうちに，生まれたばかりの赤ん坊と共に亡くなってしまう。1898年４月１日のことであった。愛する妻子を失った悲しみはあまりに大きく，チップスは悲嘆のあまりに茫然自失の有様となり，生徒たちから五十歳にして既に老人とも見なされるようにさえなってしまう。ただ幸いなことに彼には単に老いさらばえた感がなかった。さすがに彼の頭髪はこの数年のうちに胡麻塩になってはいたものの，彼の年齢の半分しかない若者相手にクリケットをして50点も叩き出したりする元気と仕事への興味と熱意を失うことはなかったのである。気持は青年だとチップス自ら語ることができた。この頃のチップスの風貌について作者の語るところによれば，妻の死から２年程が経った新しい世紀の始る頃には，彼の増々つのる風変わりな癖としばしば繰り返される冗談とが渾然一体となり一つの調和を見せている円熟の域に辿りついていた。

チップスのユーモア，それは彼を彼たらしめている最大の特長の一つであった。彼の周囲にはいつも哄笑の渦がわき起こった。彼は洒落の名人と評され誰もがそれを聞きたがった。彼が会合の席で挨拶に立つ時，部屋でテーブルを挟んでの会話の折には彼と同席の者たちは心から彼の口から冗談が飛び出して来るのを待ち構え，笑おうという一心で耳を傾けるものだから，いとも容易に満足させられた。肝心要の点まで来ないうちから笑い出してしまうという具合であった。

チップスに当代の世界の状勢などに関することなど諸種の質問が浴びせられるのであるが，それは彼があたかも預言者と百科辞典を兼ね備えているかのようであったからであるが，それらの答えに彼が洒落を皿に盛りつけたかのように出してくれることを誰もが楽しんでいたからであった。

チップスは何よりも祖国イギリスを愛し，信じ，そしてそのイギリスの伝統と教育の一端を担うブルックフィールドに対しても同様の気持を抱いていた。

"...always, whatever happened and however the avenues of politics twisted and curved, he had faith in England, in English flesh and blood, and in Brookfield as a place whose ultimate worth depended on whether she fitted herself into the English scene with dignity and without disproportion."

「いついかなる時でもいかなることが起きようと，政治の進む道がいかにねじれ曲ろうとも彼はイギリスを信じていた。イギリスの肉と血を信じそしてブルックフィールドに対しても，その窮極の価値が威厳を以て釣合いを失わずにイギリスという舞台に自らを合致させられるかどうかにかかっている場所として信じていた。」

1908年チップスが60歳になった年のこと，校長ロールストンにチップスがラテン語やギリシア語の授業法をめぐって批判を受け，又教師用ガウンのだらしなさを指摘され，辞職を要求されるということがあった。しかしこの時元々ロールストン校長の教師たちへの奴隷的駆使への反発もあったこともあり，チップスの旧式な教育法を認めている若い教師たちの多くもチップスの周囲に集り，チップスが学校を追われるものならば暴動が起るだろうという噂もたつ程であった。理事のジョン卿もチップスに理事会としてはチップスがいないブルックフィールドは昔の面影も失われるも同然のこと，百歳までも留まって欲しいとチップスを励ます。チップスなくしてブルックフィールドは存在しないも等しい程にチップスこそはブルックフィールドの伝統であり，その精神の支柱となっていた。1913年チップスが65歳を迎えた夏，気管支炎を患い冬の学期をほとんど休んだこともあり，その7月，ブルックフィールドでの42年間の幕を引くこととなったが，第一次大戦の戦下若い教師たちが次々と入隊していくこともあったとは言え，ロールストンの後を継いだケンブリッジ出身のチャタリス新校長によりブルックフィールドへの復職を乞われたことは，その紛れもない証明であった。チャタリスの発病に伴いチップスは校長事務取扱いとなることとなったが，戦時下のチップスの役目の一つとして日曜毎に礼拝堂で戦死者名簿を涙声で読みあげる時の彼の悲痛な姿があった。1918年11月，理事会に辞表を提出した。それから15年後彼は豊かな安らぎの中でその当時のことを追想する日々を送ることとなる。そのような日々夏の季節がめぐってくると，ひっきりなしに生徒たちが訪れ，週末に

は昔の教え子の誰かがブルックフィールドに，そして彼の家を訪れてくれる日々を過した。1929年後は彼はブルックフィールドを離れることなく，天気さえ良ければ学校まで出かけ，自室に尋ねる客人を相変らず厚遇する日々を重ねた。1930年遺言状を作成し，貧民施設とウィッケット夫人に残す遺産の他は奨学金制度の基金に充てることを条件に全額を学校に寄附した。

1933年の11月の午後，ウィッケット夫人の家の応接間にいたチップスは，体の不調を感じていたが，礼拝式で風邪を引いたものらしかった。彼は夢見るように自分の生涯を回想する思いに耽りながら，1860年代のケンブリッジのこと，グレイト ゲイブル山でのこと，ブルックフィールドでの年々のことなどをまるで長い絵巻物を見るように思い起こしていた。そこにリンフォードという生徒が訪ねて来て，この小柄なまだブルックフィールドに来たばかりの生徒に，チップスは63年も前になる彼がブルックフィールドに来た時のこと等を語る。このリンフォード少年は帰り際に "Good-bye, Mr. Chips...." という別れの挨拶をする。この「チップス先生 さようなら」という言葉が，それから炉辺に戻って坐ったチップスの心に何故か気に掛かり，いつまでも反響してこだまする中に彼はうとうととした眠りに落ちていく。気が付くと寝台に寝かされ，チップスの枕辺に医者のメリヴィル，新任校長のカートライトその他の人々がいて，チップスの亡くなった妻のことなどを話していて，チップスに子供もなかったことを気の毒なことであったなどという話がなされている。それが聞えたチップスはつぶやいて言う。

"I thought I heard you—one of you—saying it was a pity—umph—a pity I never had—any children...eh? ...But I have, you know...I have...."

「僕は君たちが—君たちの一人が，可哀想だったと言っているのが聞こえたようだがね—僕に，子供が一人もいなかったことが気の毒だったとね…でも僕にはいたんだよ…いたんだよ…」

そして彼は弱々しいクスクス笑いをしながら，声震わせながら楽しそうに続けるのであった。

"Yes—umph—I have," ... "Thousands of 'em...thousands of 'em... and all boys...."

「そう，うーん，僕にはいたんだ」…「何千人もの子供たちが…しかもみんな男の子たちがね」

するとそれから彼の耳に最後のハーモニイが，いままで聞いたこともない荘厳さでそして甘美に又心地よく響き，彼はやがて眠りに落ちていく。

翌朝，朝食の鐘の音が響いた時，訃報が告げられ，「ブルックフィールドは彼の優しさを決して忘れることはないであろう。」とカートライト校長が締めくくった。

V

The Leys はケンブリッジの実業家で初代ケンブリッジ市長となった Thomas Hovell が The Lays の校長宿舎となる家を1815年に建てたことに始る。その後種々経過を経て1873年７月２日メソディスト高等教育委員会に１つの報告書が提示され，それには "it is desirable to establish a good Public School upon the Leys Estate, Cambridge"[6]「ケンブリッジのリーズ地所に優れたパブリック スクールを設立することが望ましい」という答申が出された。そしてその答申には学校がメソディスト経営の下に置かれるべきながら，他教会に属する男児たちにも開かれるべきとされ，この敷地に新しい建物を建てるための資金調達についていかになされるべきかが記された。そして寄贈者たちはこの学校で教育を受けることの出来る生徒を指名する権利を持つというものであった。設立委員会は英国全土の他のパブリック スクールの校長たちに経営原則，授業料及びカリキュラムについての質問状を送り，委員数名が Marlborough, Haileybury College, Charterhouse を訪れ又他に Rossall, Cheltenham, Clifton そして Bradford からの情報を得た。その中で新しい学校の構成に関して最大の影響力を与えたのは Marlborough であった。当時イートンに次いで二番目にオックスフォード及びケンブリッジ両大学での奨学金受領者の数を誇っていたからであった。初代校長には Dr Moulton が校長職を依嘱され，彼による学校の三原則が打出された。"Everything was to be of the best quality"「万事最高の質が保たれること」"Religion should be the underlying principle of all elements of school life"「宗教が全ての学校生活の要素の基盤の原則であること」"Although Methodist, it must be free from a narrowly sectarian

character”[6]「メソディスト宗派であるにしても偏狭なセクト主義的性格から解放されねばならぬこと」という三原則であった。

第１回生は全員メソディスト宗派の家族からの生徒たち，総数16名であった。リーズ スクールの機関誌 *The Fortnightly* には「1875年２月16日，リーズ スクールに最初の生徒たちの小さな一団が到着した」[7] と記されている。「学校敷地は校長宿舎となる建物を囲んだ起伏する森小立のある私有地といくつかの完成半ばの付属の建物から成っていた。」「多くの教室，広々とした食堂はその当時は建築家の頭の中に描かれた設計図のみであった。現在の校舎，第１校舎と第１，第２寮の壁面は実際建てられてはいたが，“The Original XVI”「16名の第１期生」がそれらを所有することになった時，どちらも維持できる状況ではなかった。」「その後４週間後に正式な開校日のために建築作業は十分な進展を見せ，（校長宿舎から）16名はその前夜第１寮に移り，来賓を迎えるために旗や花環で飾り付けた。」「礼拝式がこの部屋でとり行われ，そして説教の中で学校の目的と期待とが述べ伝えられた。閉式の祈りの後，少年たちを含めて，出席者全員がトランピントン ストリートからケンブリッジ ギルド会議所まで行進し，そこで St. ジョーンズ コレッジ厨房から用意された昼食が出された。昼食には百人を越す来賓が出席した。」「リーズ スクールは驚く程短期間で確固とした土台の上に設立を見たのである。」[8]

リーズ スクールに関して，我々日本人にとり，極めて興味ある歴史的事実について特筆すべきことがある。それはこのスクールが特にその創立から間もない時期に日本から相当数の留学生を受入れ，送り出しているという事実であるが，このことは数ある英国パブリック スクールの中で唯一無二と思われる程に異例であると考えられる。これは日英交流史という観点からも，日英教育史の点からも極めて特異なことである。Dr. Houghton の著に「日本の皇太子（後の天皇陛下裕仁）」という見出しで記されているところによれば以下の通りである。

「日本の王朝の交替に次いで新天皇は宮中廷臣たちの子息たちをイギリスの学校及び，大学へ送り出す政策を打出した。この学校は僅か数年前に創設さ

れていたにも拘らず，いくらかの日本の少年たちがリーズ校へ送られた。その結果この世紀の変り目までには約20名の日本のリーズ校卒業生が出ることとなった…。皇太子裕仁親王が1921年名誉法学博士号を受けるためにケンブリッジ大学を御訪問の折，裕仁親王は最初にこれ程多くの著名な日本人たちが学んだリーズ校を訪れられた。僅か10分程の短い訪問の間，北A棟，B棟前の中庭を行進するジョン・スターランド大尉指揮の儀じょう兵を閲兵された。」[9]

この著には儀じょう兵を閲兵されている後の昭和天皇の写真が掲載されている。

上記の初期の日本人留学生についてはリーズ校の正門を入ってすぐ右手にある，この学校の礼拝堂であるチャペル史 *The Chapel: A Brief History* (2006) にその巻末付録として特別の頁を設けて詳述されている。これによってリーズ校にとり，日本からの留学生としてはるばる海を越えて渡り，学び，卒業した日本人留学生がいかに貴重な存在であったかが窺い知れる。これら留学生は明治年間にいち早く英国留学を果して，立派な学業を修めた若者たちであり，後に日本に於ける政治外交等の分野で優れた足跡を残した人々である。その後の日本からの留学生たちの先達として，日英の教育交流史，日英文化交流史の観点からも極めて貴重な存在であったと称すべきである。

チャペル内付家具及び内陣ステンドグラスの下に 'THE GIFT OF JAPANESE OLD LEYSIANS IN REVERENT MEMORY' と記されている。又他に1枚のステンドグラスの下に 'IN MEMORIAM COUNT HIROSAWA B.A. , LL.B. NORTH HOUSE. A. 1888-1890' と記された銘板が付されている。Dr. Houghton によれば，この後者のステンドグラスは廣澤伯爵が亡くなった折に，遺族によって寄贈されたものという。廣澤伯爵というのは廣澤金次郎(1874-1928) 伯爵のことと思われ，長州藩士の父真臣の維新の巧，自身のスペイン・ポルトガル特命全権公使の功によって1884年（明治17年）に伯爵に叙せられ，貴族院議員（明治30. 7 ～大14. 7），総理大臣秘書官等を歴任した人物である。筆者はこれらステンドグラスを今夏このチャペル内で確認することが出来た。

チャペル内陣の壁に以下の銘板にチャペル内付属家具，及び内陣ステンドグラスを贈った14名の日本人リーズ校出身者が記されている。

HON. Y. FUJIMURA (1887-88), S. HINO (1900-02), COUNT K. HIROSAWA (88-90), SHU IMAMURA (96-99), C. KAWAKAMI (88-91), COUNT T. KAWAMURA (88-91), S. KONDO (02-03), T. MASUDA (91-94), HON. N. NABESHIMA (92-95), COUNT N. OGASAWARA (02-04), HON. M. SOYESHIMA (88-91), G. TANAKA (90-93), VISCOUNT T. YAMAUCHI (87-87)

このように1887年から1904年までの留学生たちである。

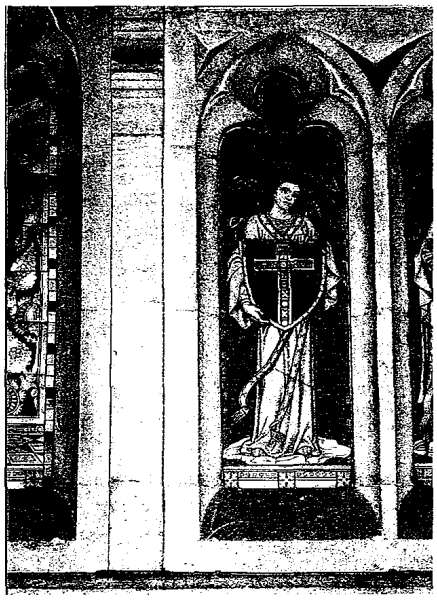
チャペル史には以下のような記述がなされている。

「初期の時代に於いて，リーズ校は日本からの生徒を入学させるという点で英国の寄宿学校の中で特異であった。ダルウィッチ コレッジ(Dulwich College）が1889年夏に出た一人の日本人の少年の記録を持っているが，ウェストミンスター スクール，イートン コレッジ，或いはウィンチェスター コレッジのこの時代の住所氏名録にはいかなる日本人名も見当たらない。又，当初リーズ校が入学させた唯一の外国人生徒は日本人であったことは注目すべきである。1925，1929及び1934年の住所氏名録には6人の日本人が第一次大戦以前に学び，戦後6人を数えた。そのことは1887年から1927年の間に総数26名の日本人の生徒たちが入学したこととなる。1927年以後は第二次大戦後の住所氏名録に次の生徒が表れるのはほぼ50年の間を置いてからのことである。」(10)

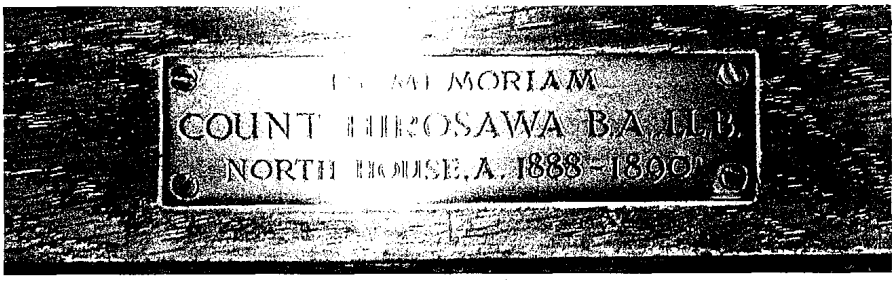
1887年は明治19年であるが，それはリーズ スクールが設立されて僅か12年のことであったが，このような早い時期にこの学校の存在がどのようにして日本に知られるようになったか，その経緯は極めて興味深く思われる。そもそも誰によってこの学校に関する情報が日本にもたらされたのであろうかという点である。その点を明確にする手立てはないが，このリーズ スクールがケンブリッジ大学に隣接している点が，その点について多少の推測を与えてくれるものであるかも知れない。先に記したように，リーズ スクールがケンブリッジ大学最初のコレッジ，ピーターハウスからほぼ5～600メートルの距離でしかなく，ピーターハウスのすぐ斜め前にはペンブルック コレッジがあり，その先にはすぐコーパスクリスティ，セント キャサリンズそしてキングズまでも約1㎞位の距離でしかない。更にクレア，ゴンヴィルキーズ，トリニティ，セント ジョーンズと各コレッジまでも僅か1.5㎞程度

である。このケンブリッジに最初の日本人留学生で，後に文部大臣を務めた菊池大麓が「トリニティイ カレッジに入ったのが1870年代の初めかその前後である」[11] という記事が「日本と英国の大学」という題で『タイムズ』に1904年（明治37年）に出されている。但しこれにはその4日後にトリニティではなくセントジョーンズ カレッジであったという修正記事が出されている。[12] 菊池大麓はそれより先，ロンドン大学の一部であるユニバーシティーカレッジの附属高

The Leys School の Chapel



①



②

The Leys School に学んだ初期日本人留学生献上のステンドグラス（①，②は廣澤伯爵に因む）

校に相当する「ユニバーシティーカレッジ スクールを1873年（明治6年）に卒業している。」[13] 菊池はその後ケンブリッジ大学とロンドン大学に進学するが，ケンブリッジに入学することが1873年5月段階で許可されていたことによっても，リーズ スクール開校の1875年はケンブリッジ在籍時であったと推測される。又，菊池と同じ1873年11月にトリニティ コレッジへ入寮し，ケンブリッジへの入学許可を得た者に村上敬次郎という人物もいたが，彼は1874年には日本に帰国している。[14] このことからすればリーズ スクール開校当初にはやはり菊池大麓のみがケンブリッジにいたと思われ，この菊池を通してリーズ スクールについての情報が日本に伝えられていた可能性があろうかと推測される。菊池は「セント ジョーンズ カレッジの最初の中庭を囲む…「F」という一角の二階に住んで」「1873年10月から卒業した頃までそこに住んでいた」とされ，「カレッジの居住者リストでは1876年には別人の名前が記入されている。」[15]

Good-bye, Mr. Chips はイギリスの良き伝統と精神性をその教育に於いていかんなく受継いで，その建学の精神に培われた優れた人材を育て，世に送り出そうとするパブリック スクールの一つ，リーズをこよなく愛し，そこに半生を捧げた一教師の物語であった。この小説に描かれる様々なエピソードを通して，英国のパブリック スクールの教育と学校生活の一端を垣間見ることが出来，それによって英国の文化の貴重な一面に触れることが可能となっている。この物語はその意味で，英国の教育と文化研究にとっての得難い資料である。

この小論の結びに主人公チップス先生の愛すべき又忘れ難いその風貌と人となり，そして信念を最も良く描き出していると思われる箇所を引用しておきたい。

"He found that his pride in Brookfield reflected back, giving him cause for pride in himself and his position. It was a service that gave him freedom to be supremely and completely himself. He had won, by seniority and ripeness, an uncharted no-man's-land of privilege; he had acquired the right to those gentle eccentricities that

so often attack schoolmasters and parsons. He wore his gown till it was almost too tattered to hold together; and when he stood on the wooden bench by Big Hall steps to take call-over, it was with an air of mystic abandonment to ritual. He held the School-list, a long sheet curling over a board; and each boy, as he passed, spoke his own name for Chips to verify and then tick off on the list. That verifying glance was an easy and favourite subject of mimicry throughout the School—steel-rimmed spectacles slipping down the nose, eyebrows lifted, one a little higher than the other, a gaze half rapt, half quizzical. And on windy days with gown and white hair and School-list fluttering in uproarious confusion, the whole thing became a comic turn sandwiched between afternoon games and the return to classes."

「彼はブルックフィールドに対する自らの誇りは翻せば自分自身と自らの職分に対する誇りゆえであると感じていた。それは実に見事にそして完璧に自分自身となり得る自由を彼に与えてくれる仕事であった。彼は年の功と円熟とが合埃って，前人未到の特権領域をかち得ていた。彼は教師や牧師の職にある者たちがしばしば陥入りがちな穏やかな奇異さに対しても当然の権利を得ていたのである。彼は教師用のガウンを殆んどボロボロにちぎれて，まともに着ていられない位まで身にまとっていた。そして彼が点呼を行うために講堂の階段の傍の木製のベンチに立つそのいで立ちは儀式に神妙に身を委ねている風であった。彼は下敷の厚紙に丸めた一枚のひょろ長い出席簿を持っていた。そして少年たちが一人一人通りすがりに自分の名前を告げると，チップスが確認に名簿にチェックの印を付けた。その確認の時のチップスの目付きというものが学校中で皆が気軽に真似て受けている仕草となっていた—鋼鉄縁のメガネが鼻からずり落ちそうになりながら，片方の眉毛だけをやや高く吊り上げて，半ばうっとりしているような，又半分いぶかしそうな，見つめ方をした。そして風の強い日にはガウンも白髪も名簿も滅法派手に吹きなびかせているそんな格好全てが，午後の競技の時間と授業に戻る間に差しはさまれた一場の喜劇となっていた。」

註

(1) Ian Anstruther, *Dean Farrar and Eric* (London: Hagerston Press, 2002), p.11.

(2) Nigel Goodman, *Eton College* (Pitkin Unicrome, 2000), p.14.

(3) Geoff and Pat Houghton, *Well-regulated minds and improper moments* (Cambridge: The Governors of The Leys School, 2000), p. iv.

(4) *Ibid*, pp.65-69.

(5) *Ibid*, pp.244-247.

(6) *Ibid*, p.7.

(7) *Ibid*, p.8.

(8) *Ibid*, pp.9-11.

(9) *Ibid*, p.199.

(10) John Harding, *The Chapel: A Brief History* (Cambridge: The Governors of The Leys School, 2006), pp.36-37.

(11) 小山騰『破天荒〈明治留学生列伝〉』講談社1999，p. 12.

(12) 前掲書 p. 15.

(13) 前掲書 p. 17.

(14) 前掲書 p. 84.

(15) 前掲書 p. 89.

なお，原作の英文は以下より引用した。

Good-bye, Mr. Chips by James Hilton (London: Hodder & Stoughton, 1959)

この小論中の James Hilton, W.H. Balgarnie の写真資料，彼らに関する記述の抜粋引用については，*Well-regulated minds and improper moments* の著者 Dr. Houghton に転写，記述の許可を与えられた。このことに深甚の感謝を記すとともに，筆者に Dr. Houghton への紹介の労をとって下さった，ケンブリッジ大学ペンブルック コレッジ フェロウ Dr. Colin Wilcockson に併せて深甚の謝意を記したい。他の写真資料は全て筆者自身の撮影によるものである。